

我が青春の戦史

齋藤 清

南台三丁目

昭和二年二月五日、佐世保の復員局より汽車に揺られながら疎開先の長野県岡谷市の母の元へ還った。敗戦帰還兵の目に映った鉄道沿線の惨憺たる焼け野原は、祖国日本の再起不能を思わせた。あれから半世紀の歳月が経過しようとしている。その後の日本は、正に驚異的復興を成し遂げた。

私の原隊は中国華北省北支派遣軍の河部隊、この第四一師団の戦友達はニューギニアに転戦を命ぜられ、このニューギニアにおいて全員散華している。こうして異郷に屍を曝した日本兵は二百万人を超えると聞くにつけても、運よく日本の土を踏んだ上に、あれから平和な戦後を生きてきたことを思うとき、何も彼も夢としかいいようのない思いである。中国大陸で過ごした足掛け五年間の兵歴も、また青春時代に深く絆で結ばれた温情の地でもあった。

昭和十七年七月初め、宇品より幾多の先輩達が血を流した戦場へ向かって船出した。関門海峡を通過、海上より見る本州、九州の景観は見事であった。遠くかすんで行く故国に遙拝し、

別れを告げた。数時間して釜山に上陸、これから長い長い有蓋貨車の旅である。朝鮮半島をガットンゴットン、ガットンゴットンと北上し、満州（中国東北部）は奉天を過ぎていよいよ我が国の二六倍の中国大陸。初めての駅が山海関である。延々と続く万里の長城を眺め、偉大なる中国を初めて見た。「麦と兵隊」に歌われた大平原は行けども行けども麦畑。終わると綿畑、とうもろこし畑で地平線が見事である。太陽が地平線から出て地平線に沈む穏やかな穀倉地帯を、ガットンゴットン、ガットンゴットンと過ぎる頃からトーチカや望楼を見た。濟南作戦、徐州会戦を頂点として、占領地区は、徐々にはあるが、一応治安地区が拡大しつつあった。蒋介石の中国軍は、重慶の奥地に逃げ込んでしまった。当時中国には八路军という中共軍がいた。この八路军が反抗し、しばしば駐屯地を侵し、鉄道を破壊し、電話線を切断する等の挙に出ている。華北省の都天津より日本軍の手により開通した津浦線を南下。治安状況によっては二時間以上停車することもあった。日米開戦後の緊迫した状況下で、

朝食、昼食、夕食と行く先々の兵站で準備してくれる弁当を、粗末ではあるが有り難く頂戴する。何せ千名からの大部隊である。大変なことだ。

釜山上陸以来一週間、ようやく目的地の徳県に到着した。第四一師団中将真野五郎、鬼の河部隊、これが私の原隊。これから五か月間、星一つの二等兵。格子なき牢獄、星二つの一等兵になるまでそれは厳しい訓練であった。

起床ラッパで跳ね起き、床片づけ、服装を整え、営庭での点呼。点呼が終わるや既に駆け足。これから馬との付き合いが始まる。教えられながら馬を引き出し、寝藁干し、馬房の清掃、馬草入れ、水飼、飼付けと、息つく間もない忙しさ。兵営に帰って洗面、朝食。味を噛みしめる余裕等なく、汁をかけて流し込み、いただきますで終わる。手は馬糞だらけ、三步以上は駆け足である。

日課の訓練が始まる。不動の姿勢に始まり、銃の名称、射撃訓練、午後は馬の扱い方、鞍の置き方から乗馬訓練、終わって馬の手入れ、水飼、飼付けをすませて、班に帰れば銃の手入れ、終わってや々と夕食となる。夕食後は勅諭の暗唱に始まり、色々の守則の勉強である。朝から新しく厳しい軍隊生活の体験にくたくたとなって、夕点呼が終わわり、やれやれひどい一日だった。これでやっと就寝出来るわいと一服と思ったとたん、「補充兵集合」と古年兵の躡しづが始まる。なんののかのと躡しづは厳しい。一発ビ

ンタで飛ばされる、ひどい毎日が続く。これが軍隊生活、一期の検閲まで続く。これに耐えられず脱走するもの、手榴弾で自殺するもの、飲んではいけない生水を我慢出来ず飲んだら最後、下痢と腹痛で苦しみ死亡する者も出た。野戦病院で死んだ者は、小さな箱に白布で包まれて中隊に帰って来た。戦病死者も多く出た。ほどなく一期の検閲も終わり、半人前の兵隊さんが出来たようだ。これから衛生勤務等、色々な勤務につくことになる。昭和十七年十二月、星二つの一等兵に進級したが、新兵が来るまでは忙しいことに変わりはない。

その日は晴れているのに黄塵万丈、太陽が薄れて夕暮れを思わせることがあった。気流に乗って日本にもやって来る黄砂の吹き上げである。また、大発生したいなごの成群の大移動。どこもかしこもいなごだらけ、地球上緑一色。軍服も緑、口を開ければ口の中へ飛び込んで来る。大空はこれも夕暮れ、誠にすごいの一語につきる。

いよいよ冬期、気温は零下二〇度、大陸性気候といつて東京育ちの私達には誠に厳しい寒さである。

昭和十八年早々、部隊が急に変わった。ニューギニアに転戦の命下る。次々と出動部隊は青島に集結。大輸送船団は、艦隊の護衛のもと、ニューギニアに向かった。無事にニューギニアに到着したことは一年位あとで聞いたが、この大部隊は二度と帰ることはなかった。私達も軍馬とともに少し遅れ

て青島に集結。二か月間二次輸送船団を待ったが遂に来なかった。来ていれば今日の私はなかった。人生の分かれ目は紙一重と言う。ガダルカナルの日米海戦において大打撃を受けた連合艦隊は、兵員輸送の艦船が極度に不足してしまっていたようだ。昭和十八年初めにして戦力の低下はいなめなかった。

本隊にはぐれた私達の部隊は、天津に司令部のあった独立混成第九旅団（谷部隊）に転属になり、徳県から天津の北方、タークー地区の警備を担当。昭和十八年十二月、上等兵に進級した。と同時に中国の大都会天津の東駅前にあった天津兵站事務所勤務となった。南太平洋のソロモン島の敗北、サイパン島の玉碎と、戦況は極めて悪化していたが、中国派遣軍百万の将兵には、このような情報は伝わらなかった。昭和十九年六月、主計下士官の教育のために、北京の東にあった郎坊に派遣された。

昭和十九年十月、兵長に進級した。引き続き天津兵站事務所において従軍看護婦の一団の宿泊、連絡のための将兵の宿泊者の手続等、また内地帰還者の兵站事務等についていた。

昭和二〇年三月、主計伍長に任官した。その五月、天津駅兵站の谷部隊砲兵隊に転属となった。

それは昭和二〇年八月十五日。部隊三個中隊挙げて剣術・銃剣術大会の試合が行われ、私も竹刀を持って参加していたが、正午に重大放送が行われると言うことで中止となり、部隊長以

下全員営庭にセットされたラジオを聞いたが、混線はなほだしく、よく聞き取ることが出来なかった。司令部から徐々に情報が入り、どうやら敗戦らしいと言う。無傷の中国派遣軍には理解出来ないことが戦友から戦友へと伝わり、今まで体験したことのない場面に突き当たった。夕刻司令部より指令があり、すべての文書類を焼却、兵器の整理をすべしと、その対応は大変だった。今あの時のことを思い出して、よく大過なく難題を解決して無事帰還出来たものだとつくづく思う。

蒋介石総統の命令で、中国全土の日本軍將兵を、奥地の駐屯部隊より順次帰還させると言うことを聞いて、頭の下がる思いであった。

昭和二〇年九月、米軍の中国進駐により天津北駅の部隊兵舎を明け渡し、天津駅より南へ三〇キロほどの滄県に移駐。昭和二一年初めまで蒋介石の中国軍を助けて、八路軍、現在の中共軍のゲリラを制圧すべく出動。帰還まで武装解除せず山砲、野砲という強力な戦力を持っていたので心強かった。中国軍の要請により、時々山砲の発射が営庭より行われ、使役を全うした。そのためか、武装解除されたあと、帰還にあたって中国軍は割に好意的で、なんらトラブルはなかった。

いよいよ帰還命令が下り、天津貨物廠に集結した。武器を取り上げられた私達は丸腰。途端に捕虜となり不自由の身となった。乗船手続きも完了した。「崎」という字のつく名前の人は、

戦犯容疑者として残されたが、この人達は別に調べもなく、一か月ほど後に後続の帰還兵と一緒に帰られたと聞く。

塘沽港タクトウより私達の乗った米軍のLSTは千トン位の戦車揚陸艦で、船内にM4戦車を十台くらい収容できるようであった。

このLSTの艦底に詰め込まれた千人近い我々引き揚げの将兵は、磁石を見ながら日本のいずれに到着するのか噂し合っていたが、浮沈の激しい小さな船での東支那海の一週間は、自分のリュックに身を託し、波の静まるのと早く到着するのを祈るよりなかった。

「オーイ着いたぞ」と甲板から叫ぶ戦友の声で、艦底でうつらうつらしていた私は、甲板に飛び上がって、どこだどこだと叫んだ。佐世保ということだ。海上から見る佐世保の港内や遠く霞む緑の山々の美しさ。しばし茫然として見とれていた。荒々しい軍隊生活で忘れ去っていた心の安らぎを覚えたことを懐かしく思い出す。LSTの船首が開き、いよいよ上陸の時が回って来た。私は、帰って来たぞと大声を出しながら飛び上がって日本の土を踏んだ。それは、昭和二年二月一日の午後だった。多くの戦友は、翌二日の早朝、東京行の列車で部隊の半数が故郷に向かうということで、それに間に合わせるべく俸給臨時手当の支給計算に徹夜をした。九州といっても二月の深夜、ぞくぞくするほど寒い。火の気は全然ない引揚者収容所の一室で、ソロバンをはじく指ももつれがち。それに眠気も手伝って、一

度や二度では合わない始末。やっと仕上げた時は夜は明け放たれ、これでどうやら各自にお渡しできるとホッとするとともに、晴々とした最後の仕事をやり終えた満足感があった。第一陣を送り出して少し余裕の出来た夕べ、大広間で上陸二日目を迎え、生死を共にしてきた親しい方との最後の別れの一夜だった。

昭和五四年九月二十九日、再会出来た戦友四十余名とともに靖国神社の奥深く、神殿に参拝。戦没された多くの戦友の冥福を祈ることが出来た。